

# 一五九二年天草版『ヒイデスの導師』の諸問題

鈴木 博

## A study on "Fides no dōxi".

Hiroshi SUZUKI

### 一、ライデン本について

一五九二年に九州の天草でイエズス会によって出版された「FIDES NO DŌXI」(ヒイデスの導師)洋装一冊本は、現在では世界の孤本としてオランダの国立ライデン大学図書館 (De Bibliothecaris der Rijksuniversiteit, Leiden, Rapenburg 70-74, The Netherlands) に貴重されている(本書は Serrurier の一八九六年版「Bibliothèque Japonaise」No. 614に解説されていて、同館における日本関係の古書は Serrurier のこの書の順に配架されている)。本書は日本語がポルトガル式ローマ字綴りで印刷されており、この点で同じくイエズス会から本書の前後に刊行された、

① サントスの御作業のうち抜書(一五九一年加津佐版)

② ドナリイナ・キリシタン(一五九二年天草版)

③ 平家物語、イソップ物語、金句集(一五九三年天草版)

などと同様である。ただし④が口語体を基調とするのに対して、本書は①②と同様に文語体であり、かつ内容的にも宗教文学に属している③とは趣が異なる。

当時の印刷部数は七百程度と推測されるようであるが、「ヒブリア」14の新井トシ氏「きりしたん版国字本の印行について」(四四頁)、①②③と同様にただ一本しか残存せず、その稀覯なことはこの上もない。現況は改装さ

れているが、縦一五・九糎、横一〇糎の小型本であって、この点でも前記の①②③と共通している。総頁数は六六一で(扉を除く)、内訳は次のとおりであるが、この厚冊という点においてもまた①②③と共通性がある。

序文 一〇頁分(第一序文が三頁、第二序文が三頁、第三序文が四頁)

本文 四卷 六一九頁

第一卷 一〇七九頁 八章

第二卷 八〇〇三七二頁 二八章

第三卷 三七三〇五七三頁 二〇章

第四卷 五七四〇六一九頁 四章

正誤表 一頁分

目録 七頁分

和らげ 二四頁分

ただし製本ミスが生じていて、実際は次のような頁順になっている。

420 (ここまでは正しい) 437-452 421-436 453 (以下は正

しい)

つまり十六頁(一折)分が入れ違っている。このようなミスが当時刊行された「ヒイデスの導師」のライデン本以外の本にも生じていたの

か、それともたまたま現存本にだけ生じたのかは知るよしもないけれども、他本に生じる必然性が乏しいように思われるので、後者である蓋然性が高いであろう。

## 二、書名について

書名は今日二通りに呼ばれている。一つは「ヒイデスの導師」(または「ヒデスの導師」)で、他の一つは「信心録」である。ライデン大学では Serrurier の前掲書に従ったのであろうか、「FIDES NO DOXI」として登録されている。この書名は扉の上部に次のようにローマ字文で記されているところに基づく。つまり、これを下略したものである。

ヒイデス(信仰)の導師として、P.(パーテル)F.(ヘレイ)ルイス・デ・ガラナダ編まれたる書の略

もう一方の書名の「信心録」は、本文各巻冒頭にローマ字綴りで「信心録 卷の一(一、三、四)」のようにあり(末尾の目録も同様)、かつ本文偶数頁の上部に同じく「信心録」とあることによる。ところで前掲③の場合にも扉にはローマ字綴りで「サントスの御作業のうち抜書」とあるのに対して、各巻末には「サントスの御作業」とだけあり、さらに第一巻の目録の見出し、言葉の和らげの見出し、および奇数頁の上部の多くでは単に「御作業」と略称されているので、本書の場合も「信心録」の方が略称と考えられる。

以上の二通りの書名のほかに、最終に付載の難語の和らげには「この四巻のヒイデスの経のうち分別しにくき言葉の和らげ」とあって、「ヒイデスの経」という呼び名も考えられる。しかし本書の第一、第三序文および本文六八、二二八、二九八、三〇四、五九四頁で、ガラナダの原スペイン語本(姉崎正治博士によれば一五六四年版本で、ヨハネス・ラウレス師によれば一五八二年版本)を「ヒイデスの経」と呼んでおり、それをガラナダが要略したスペイン語本(姉崎博士に従えば一五八二年版本、ラウレス師に従えば一五八五年版本)の「小さき経」からの抄訳が本書である

し、また一六一一年にイエズス会が長崎で出版した国字本「ひですの経」(現所在不明)もあるので、書名の上での混同を避けるためにも、本書を「ヒイデスの経」とは呼ばない方がよいと思う。

## 三、原著者と原典について

原著者はルイス・デ・ガラナダ Luis de Granada(一五〇四—一五八八)で、スペインに生まれたドミニコ会の名僧である。「ギヤ・ド・ペカドル」(一五五六年初版。一五九九年長崎版の国字本「ぎやどべかどる」は、サラマンカ版からの抄訳)等、多数の著作がある。ところで本書の原典について姉崎博士は、

その全集は三十巻もあるが、大著としては一五六四年リスボンで刊行した(但しイスパニヤ語で)教理大綱(Compendio de la Doctrina Christiana)であり……その大著教理大綱を略して出したものが、一五八二年の Introducan al Symbolo de la Fe で、この信心録の原本である。(昭和七年刊「切支丹宗教文字」二六三頁)

と述べられ、これに対してラウレス師は、

ルイス・デ・ガラナダには大著「キリスト教理大綱」(Introduccion al simbolo de la fe, 1582) 及びその要略「信仰要義」(Quinta parte de la introduccion al simbolo de la fe, 1585) とがあり、多くの国語に翻訳されてゐるが、後者はイエズス会士によつても日本語訳で出版された。その完全な表題は「ヒイデスの導師として……(昭和十五年刊、上智大学編「カトリック大辞典」I七五四頁)

と述べられた。これらの版本の所在を知らないが、一五八八年版本が上智大学キリシタン文庫にあり、またフランス語版 INTRODUCTION AU SYMBOLE DE LA FOI が天理図書館にあって(ガラナダの著作集 Louis de Grenade の第十三—十六巻が該当。図書番号19081-2-13-16 一八六四—六五年版)、それらによつてうかがうと原著書は五部から成り、その第五部はそれまでの四部のまとめになっているが、この第五部(一五八八年版によれば QUINTA PARTE DE LA INTRODUCCION DEL SYMBOLO DE

「L'ART 天理本では第十六巻の七、四四二頁が該当」が、ほぼ邦訳天草版の原典として対応する。ところで第二部からの抄訳が前掲の①の一部に存することが指摘されているが、この時の原典の第二部は一五八四年の初版らしいとのことである（昭和五十一年勉誠社刊「サントスの御作業」のチースリク神父の解説二、三四頁）。というところはIntroduction del Symbolo de l'Artéは全冊の刊行が一五八二年から一五八五年にわたっているということであろうか。いずれにせよ、この書の第五部を適宜アレンジしつつ邦訳したのが天草版である。

なお一五八八年スペイン語版第五部の各巻の章数は前記のフランス語版と等しいが、これと天草版すなわち日本語版とを比較すると次のとおりである（上が西語版で下が日本語版）。

巻一 88 巻二 30 巻三 21 巻四 64

さらに、各章を幾つかの節に分けている所があるので、それを対比すると左のとおりである（漢数字は章、算用数字は節数、節に分けていない場合は0と記す。上が西語版で下が日本語版）。

巻一。一 33 二 00 三 11 四 22 五 22 六 00 七 00 八 00。

巻二。一 00 二 00 三 00 四 11 五 33 六 11 七 21（日本語版は第1節なく第2節のみ） 八 00 九 0（西語版は第九章がなく第十二章が二つある。

仏語版は第九、十二章各一） 0 十 00 十一 00 十二 00 十三 00 十四 2

2 十五 00 十六 66 十七 00 十八 00 十九 66（西日ともに第2節が

二）。仏語版は一つだが同様に第5節で終わる） 二十 22 二十一 00 二十二 2

（仏0。この章に相当する日本語訳は省略か） 二十三 4（第3節が二つあって終わる。

仏0。この章の日本語訳も省略か） 二十四 11（日本語版では第二十二章。以下同様

にずれる） 二十五 33 二十六 11 二十七 11 二十八 11 二十九 11

三十一（仏0）0。

巻三。一 00 二 00 三 22 四 44（西日ともに第1節が二つで第3節で終わ

る。仏は第1節は一つで第4節まで） 五 00 六 55 七 33 八 00 九 00

十 00 十一 00 十二 1（第4節だけが一つある。仏0）0 十三 22 十四 33

十五 11 十六 00 十七 0（この章に相当する日本語訳は省略か） 十八 22

（日本語版では第十七章。以下同様にずれる） 十九 2（第1節なく第3節まである。仏は第1、3節） 2 二十 00 二十一 4（第5、1、7、8節の順。仏は第1、4節） 4。

巻四。一 13（仏も同じ） 12 二 0（この章の日本語訳は省略か） 三 0（この章の日本語訳も省略か） 四 4（仏も同じ） 3（日本語版では第二章。以下同様にずれる） 五 00 六 00。

以下、本稿において原典のスペイン語本の頁を言う時は、この一五八八年版を指し、それからの日本語訳は中世スペイン語専攻の畏友近松洋男氏（京都外国語大学教授）の教示に従う。

#### 四、邦訳者について

ガラナダの原典から天草版への邦訳者は、本書の第一序文の末に記すところによって、スペイン人宣教師ペロ・ラモン Pero Ramon（一五四九—一六一一）であることが知られる。かれは日本に三数十年間在住した。一五九二年の日本耶穌会目録は、かれについて「日本語を解し、それにて説教し、日本文を綴ること甚だ巧みなり」（土井忠生博士著「吉利支丹文献考」三三三頁）と記し、その日本語能力に対して高い評価を与えている。が、訳文を整える上で日本人からの直接の協力、ないし間接の影響はなかったであろうか。本書自体にはそれを示すような記述はないけれども、直接間接の日本人関係者としてシュールハンマー師、土井博士は、若狭出身の養方パウロを挙げておられる（前掲書一四五一—六頁）。ほかに、その子ヴィセンテ洞院も協力者の有力候補として考えられる。むしろ父よりも子の方が尽力した可能性があろう。というのは前述のようにガラナダの著作の一部が、本書よりも先に刊行の「サントスの御作業のうち抜書」の中に抄訳されているのであるが、その部分（第二巻十六章—二十六章）の末に「Imaño Vicente core no fonyacu su」（イルマン・ヴィセンテこれを翻訳す）とあるからである（前掲のチースリク神父の解説二七頁参照）。ところで福島邦道氏は「サント

スの御作業のうち抜書』の翻訳者パウロとヴィセンテについて、実際に翻訳したのは他の宣教師であって、この兩人は日本文として練り磨いたのであらうと従来考えられていたことに對し、最近の史料から文字どおり翻訳したと考えられそうである旨述べられた（『サントスの御作業翻字・研究篇』三六六頁）。本書の場合は、『サントスの御作業のうち抜書』とは逆に、邦訳者がスペイン人であるから原典のスペイン語の理解の点ではもちろん問題がないわけであるが、こなれた日本文とするに当たって、ヴィセンテあたりが蔭の協力者として存在していたのではなからうかと思われる。

## 五、序文について

本書の三つの序文の中の第一のものは、ラモンがガラナダの原典を日本語訳するに当たって一五九二年五月末日に書いたものであって、中に次のように述べている。

かつうは、これ新しくこの国へ渡海のバーデレ、イルマン、この書のなよをもつて日本（ヒイデス）の言葉を習わねば、かづうは、この書のことわりを達して皆人弁えんためなれば、媚びたる言葉を除き、世話に綴りて置くものなり。すなわち、本書の目的は、新来の宣教師の日本語学習用としての役目であり、またキリスト教信仰に培うためでもある。それ故に、高尚典雅な言葉でなく、一般の通俗語（俗文体）で訳すことを本旨とするのである（『媚びたる言葉』については土井博士著『吉利支丹語学の研究新版』七八頁などを参照）。このような序文は前記の①にはないけれども、②③にはある。④から摘記すると、

後生の為に専らなる事をキリシタンに教えん為に、コンパニヤの司より此の小さき経に具え給うものなり。名づけてドチリイナキリシタンと言う。これすなわちキリシタンの教と言う心なり。上下万民にたやすく此の旨を知らしめんが為に、言葉は俗の耳に近く、義は天命の底を窮むるものなり。

とあって、キリシタンの教を万民に知らせるために通俗語を以てする

と言うのみで、日本語学習用とは述べていない。キリスト教を万民に知らせるとは言っても、日本語のローマ字綴り文であって国字本ではないのだから、日本人が直接この書を読むのではなく、宣教師がこの書のような言葉を使って布教する、そういう場合に役立つようにというのであらう。④に至ると日本語稽古という目的が、総序『平家物語』の扉と序、『イソツア物語』の序に示されていて、『金句集』の本則以外は口語体で綴られている。本書の刊行上の位置が①②③と④との間であることは、この序文の言葉からもうなずけるのである。

さて第一序文が訳書に加えられた、いわば新しい序文であるのに対して、第二序文と第三序文とはスペイン語の原著に添えられていたものの邦訳かと思われる。第二序文は、法王ゲレゴリヨ十三世からヘレイ・ルイスに對する御書で、一五八一年六月二十一日の日付である。第三序文はルイス・デ・ガラナダの自序と判断され、年紀はないけれども内容上から第二と近い頃かと思われる。すなわち先に編した『ヒイデスの経』四巻を、今略して小さき経四巻となすと言ひ、各巻の主眼とすると次のように述べている。

第一の巻には、ナツウラ（自然）の道理をもつてヒイデスのことわりをあらわし、またデウス（神）のおん敬いを勧むべし。

第二の巻には、デウスの、み心に叶い奉る誠の教はキリシタンのみに限って、余には無しと書き載すべし。

第三の巻には、ヒイデスの題目は安しと雖も、とりわき御あるじゼスキリシトのご誕生、ごバツション（受難）の義を論じてより、レデンサン（贖罪）とてわれらを救い助け給わんため、道はさまざまかるべけれども、デウスのゴロウリヤ（威光）と、人のアニマ（魂）のやまいを癒やす薬は、これに過ぎたるは無しと、あらわすべし。

第四の巻には、このレデンサンを二成就あるべき趣を遙かの昔より、かねてポロヘタス（予言者）をもつて、みことのりありし事どもを、御あるじゼスキリシトつゆもたがわず遂げ給えば、はや、このレデンサンの道をば達し給うと知らしむべきものなり。

右によって本書各巻の内容を概観することができる。

## 六、正誤表に関して

本文が終わった次の頁に正誤表があり、「書き誤り」として二十項記している。このほかにも誤植があるけれども、それはさておき、この二十項を本文に当たると、奇妙なことにその第二・三・七・十六番の四つの項は、すでに訂正済みである。念のためにこれらを左に示そう。

Vomote	Cudari	Vordo	Cacu yome	本文
40	13	mixiaru.	mixiranu.	mixiranu
120	20	baji	banji	banji
199	23	ni ari.	nari	nari.
528	8	xubi tamō.	xubi xi tamō.	xubi xi tamō

このことから、ライデン本は初刷ではなく、再刷もしくはそれ以後の刷りではないかと考えられる。もしそうだとすれば、この正誤表は早い刷りのものに付されていたものが、本文の一部が訂正された後の刷りのものにも、そのまま受けつがれたのであろう。

## 七、和らげの検討

末尾に付いている「この四巻のヒイデスの経のうち分別しにくき言葉の和らげ」を検討すると、幾つかの問題が出て来る。以下六項に分かって取上げる。

【一】ウ段の長音符号は本文では $\ddot{u}$ であるが、和らげでは $\ddot{u}$ も次のように使われている。

Chigū. Cufū. Iiyū. Tairiū. 「Taxū. Yo no xūxi.」 「Voniqū.  
Nomi, cū.」 Xijū. Xūgiacu. Xūgui. Xūtan. Xūxi.

ロドリゲスは『日本大文典』(一六〇四—一〇八年刊)では $\ddot{u}$ としたが、後の『日本小文典』(一六二〇年刊)、『日本教会史』では大体 $\ddot{u}$ とした(橋本博士還暦記念会編『国語学論集』所収の土井博士論稿「ロ氏小文典のローマ字綴」二六七頁。大航海時代叢書『日本教会史』上六七頁の土井博士の補注)。

【二】標出語にローマ字綴りのまちがいが見あたるが、アルファベット順と、本文中の用語とを考え合わせることによって訂正できるのである。例えば、Inguin. (Fito no taguy.) は Iirin. (人倫)のまちがいであろう。jirin は第一序文「二〇二五 (二〇二頁15行目の謂以下同様) 二四三」に用いられている。また、Yeyō. (Cacayadi, sacayuru.) は開合の誤りのほかに、 $\ddot{i}$ を誤脱していると思われる。正しくは Yeyō. であろう。節用集には「榮耀」のふりがなとして「エイヨウ」も「エヨウ」も見られ、当時両語形があったところから $\ddot{i}$ のない形を示したと考えられるかも知れないけれども、和らげにおけるこの語の配列順が Yeitai. と Yeniet. との間であり、かつ本文では yeyō (一六〇〇10) とあるの、やはり $\ddot{i}$ の誤脱とすべきであろう。

【三】見落としているかも知れないが、和らげに標出されている語で、本文中に見つからないものが次のようにある。

- ① Accō. (Acusō の誤) (Axij casa.)
- ② Fonsō. (Chisō no gui.)
- ③ Maichō. (Asa goto ni)
- ④ Qichō. (Vyeta fara.)
- ⑤ Reifō. (Sadamatta fatto.)
- ⑥ Riōxi. (i. Cami, l. caribito.)
- ⑦ Xeisui. (Qiyoi mizzu, l. sacan ni naru.)
- ⑧ Nengū. (Toxi no vchi.)

①については「サントスの御作業のうち抜書」の和らげにおける Acu sō. の字釈に axij casa とあり、『日ポ辞書』も同様で(天草版『平家物語』「インメン物語」の和らげでは同語に対して Varui cusa, l. casa. とあり)、かつアルファベットの順序から見ても標出語は acusō. の誤りと考えられ、す

で山本昌子氏の指摘がある(昭和四十九年刊、上智大学国文研究叢書第一冊「ヒイデスの導師」の語彙「一頁」)。が、本文中には *acus* は見つからず、*axiñ casa* (二〇一七) ならばあるので、原稿または先刷りの段階で「悪瘡」あるいは *acus* とあったのを、ライデン本の本文は改めたのではないかと考えられる。他例も多く同様に考えられ、③の *Maicho* (正しくは *Maichō* とあるべきで、和らげは開合を誤っている) の類似語を本文で探すと、*chōbo* (五九二一。朝暮) や *chōxegi* (二〇三三。朝夕) が見つかる。また④の *Qicho* の類似語としては *qicat* (二二三九。飢渴) や *daicho xochō* (二四二三。大腸小腸) があり、⑤の *Reiñ* (「落葉集」の「例法」も『黒本本節用集』等の「礼法」も共に開音だから、正しくは *Reiō* とあるべきところを開合混同している) の類似語には *reixiqi* (二〇五五。例式) があり、⑥の *Rōxi* は紙の意の方の語は本文に見あたらず、狩人の意の方の語は *caribio* (第一序文。なお二二二等には *Caribio*) とあって、和らげた方の形で出ている。⑥のような事例に対して⑦は同音語のうちの一方は本文にあるが、他方は本文に見つからないものであって、「清水」の意の *xeisui* は一九七二などにあるけれども他方 (*sacan ni naru*) の意に当たるかと思われる「盛衰」の語は見つからず、漢語でなく和らげた言い方では四九一〇に *sacaye votorōru coto* とある(姉崎博士の前掲書一九九頁では「榮え」誤脱。いすれにせよ、本文に和らげの標出語の形でなく、和らげた方の形で出ているものがあることは、和らげの成立よりもライデン本の本文の方が後ではないかと思わせる。なお山本氏は「*Jodai* (*Vye no yo*。i. *Yono sacana* < *sacna* または *sacanna* の誤り *toti*。)) に対して「上代」と「盛代」との二つをあてるけれども前掲書二三頁、後者は不要であろう。というのは当時「盛代」という熟語が存在していた文証が得られそうになく(氏は一字一字を切離して「盛」の音と「代」の音が合ったから「盛代」という漢語もあったと予想しておられるようだが、これは方法論的に正しくあるまい)、和らげ方が⑦の場合は「キヨイミツ、または、サカンニナル」とあるのに比して、この場合は「ウエノヨ。すなわち、ヨノサカ(ン)ナトキ」とあるので、「ウエノヨ」も「ヨノ

サカ(ン)ナトキ」も共に「上代」に対する和らげと考えられるからであって、したがってこの場合は⑦のように問題のある例として取扱うべきでないことになる。念のために本文にあたると、

Core mina *Jodai* no coto domo nari. sarinagara nigoreru ima no  
sue no yo nimo cayō naru tamexi va vouoqi nari. (二〇五二。)  
れ皆上代の事どもなり。さりながら濁れる今の末の代にもか様な  
るためしは多きなり)

とあって、今の末代を濁れると形容していて、上代はすなわち盛んな時であったとする考え方が窺われ、あえて「盛代」という漢語を新造する要のないことの裏付けが得られるであろう。⑧の「年中」については後述する(十六)。

【4】和らげ方を見ると、標出語だけでなく本文上の前後の文意をも含んでいると考えられるもの——言葉を変えて言えば、標出の範囲をもっと幅広くすべきであったと思われるもの——がある。その例は次のものである。

① *lingo. Teuqi xenu coto*.

② *Sandan. Fome cataru*.

①は本文では八例すべてが否定表現、例えば *jingo naqi* (二六六。16。尽期なき) のような形で出ている、和らげの標出形を「*jingo naxi*」とすべきであったところであるが(和らげ方を「*Teuqaru coto*」とすべきであったとの考えもあるが、たとえば「応永二十七年本論語抄複製本六六六頁の「其ハアマリ尽期ナキホトニ」等のように否定表現で使われるのが多かったかと思われる、一面から言えば、本文理解への親切心が和らげ方に溢れ出たとも見られる。②の *Sandan* は和らげ方から漢字をあてるとすれば「讃談」(「落葉集」となる。しかし本文を見ると、

S. Paulo *sandan xite*, notamauagu (六一〇二。サンパウロさんだんして宣わく)

とあるので、「讃歎」(「落葉集」、『黒本本節用集』など)の方がより適切かと思われる、この和らげ方は「のたまわく」までを含んでいるかと

も見える。が、また視点を変えると、この語は「サントスの御作業のうち抜書」の和らげや、「日ボ辞書」一六二三年版「ロザリオの経」の和らげにも同様の字釈で出ているので、キリシタン資料のローマ字文献における和らげ方では、Sandan ≡ Fome cataru という定式があったのかと思われ、もしそうだとすると本書は少なくともこの語に関しては、単に先例を踏襲したことになるかも知れない。ところでこの項に入れ得るようにも思われるものに、

### ③ Medete, Mayô cocoro.

がある。が、これにはいろいろと検討を要する問題がある。和らげ方から見ると、標出語は名詞ということになりそうであるが、本文中の用例としては、左のとおりに動詞の連用形に助詞「て」が接続した形として出現している。

Cujacu no fajimete migeru sono cuni no fito na sono itucuxisa  
ni Medete, qimo no qexi, aqirete tatpu bacari nari. (五六二六。孔雀を初めて見けるその国の人は、そのいつくしきにめでて、肝を消し、あきれて立つばかりなり)

右の「めで」る心を mayô cocoro. と和らげたようにも思えるが、しかし「めでて肝を消しあきれ」る心を mayô cocoro. と和らげたようにも思える。というのは、もし前者の意図ならば、「めでて」と「迷う心」との間の意味の対応に問題を感じないわけにはいかないからである。「日ボ辞書」の動詞 Medete の条の用例に前掲文と酷似するものがある。その「めでて」に当たるポルトガル語の意味は「興じ楽しみ」であり（邦訳「日葡辞書」による。以下も同様。必要に応じて「邦訳日ボ」と略称する）、「迷い」の意の「めで」は存在しなかったであろうと思われる。結局、③の和らげ方は本文の文章に添って意識しようとしたのではなからうか（厳密に言えば誤訳してしまったと言えるが）。以上に述べたことは本文では名詞でないものを、和らげで名詞のように取扱っていると見た場合のことであるが、もし名詞を名詞として説明していると見ようとするならば、少なくとも次の三方面から検討しておく必要がある。

(ア)「落葉集」の「憐愛」（色葉字集18ウ）は名詞の可能性があるが、和らげの標出語をこれと同語と考えてよいのか。これについては「日ボ辞書」には名詞の「めでて」は掲出されていず、国内文献にもこのような名詞の存在が確認されていない（もちろん本書中にもない）。したがって「落葉集」に採られている「憐愛」の語性をはっきりさせることが難しく、そのような段階では、和らげの標出語をこれと同一視することは控えてはなるまい。

(イ)「めでて」の「て」を、例えば michibique (一八三。導き手)などの「手」と同じように解して「めづる人」の意にとることができるか。この点について検討すると、「日ボ辞書」には Michibique はあるけれども（補遺）、Medete は前述のように存在しない。もっとも、「ヒイデスの導師」中に使われている vgcaxite (五六。動かし手)や vgcasarate (四一六。動かされ手)なども「日ボ辞書」には採られていないので、複合名詞「一手」の辞書類に登載されていないものもあるわけだけれども、「愛で手」と解される言葉は本文中に見いだされず、他の文献からも未発見である。

(ウ)たとえば「盲愛」とか「溺愛」とかいうような名詞が、本来和らげの標出語として存在していたと仮定し（したがって「Medete, mayô cocoro」全体が和らげられた側であったと仮定し）、その名詞がどこかの時点で脱落し、そのために和らげられた文の一部（Medete）が標出語であるかのような姿になったのか。この場合「めでて迷う心」というような意味の漢語（必ずしも漢語でなくてもよいのだが）、たとえば右に示した「盲愛」「溺愛」のような言葉を本文中から探し出せるとよいのだが、容易には見つからない（「盲愛」「溺愛」は本書以外の当時の文献からも用例を見いだすことは難しそうである）。

以上のような次第で(ア)(イ)(ウ)のいずれもが否定的方向にあって、結局③は名詞でないものをあたかも名詞であるかのように、しかもかなり意識（ないし誤訳）していると考えられる。なお次の

### ④ Fason, Fune no soconuru no yû.

は、この項に入れるべきでないかも知れない。なるほど、この語の本文中での次の用例、

⑦ *nami, caje xiqirini xite, tachimachi sono fune fason xen to suru tocoroni*, (四二三) 波風しきりにしてたちまちその船破損せんとするところ(に)

を見ると、「破損」の和らげに「フネノソコマルヲ言ウ」とするのが文脈に則した和らげ方のように思えるし、また次例、

⑧ *arutoqi na fason no nan ni ai, mata arutoqi na sanzocu no nan ni ai*, (三〇二四) ある時は破損の難にあい、またある時は山賊の難にあい

の場合でも「破損の難」と「山賊の難」とが対になっているところからして、この「破損」も船の破損と解され——原スペイン語の意味も「難破の難に達して(海の危難をおかし)」(一〇三左29。一〇三頁左欄29行目の謂、以下同ジ)——この項に該当しそうに思われるけれども、しかし「日ポ辞書」の *Fason* の説明も難船の意に限定しており、「ラホ日辞書」においても難船の意であって(邦訳日ポ)の注による)、キリシタン資料において「破損」の語を専ら船の場合に用いていたとすれば、本書における和らげ方は格別目を引くものとはならないことになる。この語は静嘉堂文庫蔵『運歩色葉集』にも「破損<sup>はふ</sup>舟」とあるので、キリシタン資料だけが船の破損の場合に用いていたわけではないが、『日本国語大辞典』等では船以外の場合の用例を載せていて、船に限定して用いるのはやはり特殊な用法であるという感を免れない。

【5】前項の②のような、どういう漢字を宛てるかが難しい場合の別の例として次のものがある。

*Cugiu. Sora.*

和らげ方から見れば、標出語は *Cugiu* (空中) の長音符号が落ちているように解される。本文に *cũgiũ* の用例が、

*Aru fi no curegata ni cũgiũ ni Cruz miye tamò ni*, (五八四22) とあり、かつ和らげの標出語の中に長音符号の落ちているものが、

*Sôto*. (双方。本文四七六9は *Sôto*)

*Vonxo*. (恩賞。本文三七10等では *vonxô*)

*Yoy*. (用意。本文七23、三七六21は *yôy*)

などと思あたるので、この標出形は「空中」の意の語に当たるかと思われる。しかしまた一方では、*Cugiu* のままの形で本文で次のように使われている。

*cũgiũ no Anjo mo core no vcagai cũtũ xi tamò toqi*, (二二三12)

これは漢字をあてれば、「九重」(「落葉集」であって、このような用例はヴァチカン文庫所蔵のバレット自筆写本集の中の「我らがドミナにして天使の元后たるビルゼンの奇蹟物語」にも見え、土井博士は、「九重のアンジョより遙かの上にまします事尤も道理の至極なり」と翻字された「九重」に対して、「天使の聖秩九階級」と注しておられる「キリシタン研究」第七輯二二七頁)。「日ポ辞書」にも、*Cũgiũ* (空中) と共に *Cũgiũ* (九重) があり、*Cũgiũ no Anjo* に対する説明も施されている。和らげの標出形 *Cũgiũ* は、長音符号の落ちた公算が大きいとは思いうけれども、「九重」のつもりであつたかも知れないという懸念も捨て切れない。

【6】和らげられた説明文中の言葉に注意したいものが見える例として、次の *bentô* がある。

*Iuntacu. Vruuoi, su. bentô na coto.*

すなわち「潤沢」の和らげに「ベントウナコト」とあるのが注目される。*juntacu* は本文では一〇三18などにおいて「充分・豊富」の意で用いられ、それに相当する言葉が「ベントウ」であるが、今日の我々にとっては「ベントウ」よりも「潤沢」の方がわかりやすい(「ベントウ」については「国文学攷」二一号の拙稿「抄物語彙考」および拙著「周易抄の国語学的研究」一七五頁以下で述べた)。

ほかに「Yennan. Matoca ni mitũru」の清音形「マトカ」も注意されるが、「ラホ日辞書」、「日ポ辞書」も清音形で出ていて、濁音形は見えない。



## 八、原稿について

天草版『ヒイデスの導師』は、既述のようにスペイン語から日本語に訳されたのをローマ字で綴ったものであるが、初めに翻訳した時の原稿は国字本であったと考えられる。そのように考えられる内部徴証を本文から引出す前に、一五九〇年の日本イエズス会の記録を先に示そう。これは「一五九〇年八月、日本イエズス会巡察師アレハンドロ・ヴァリニアノによって開催された第二回総協議会」におけるものである。

日本文字と漢字で既に翻訳を終えた何冊かの書籍例えば、『どちらなりしたん』、フライ・ルイス・デ・グラナダの『黙想録』、および最近我々の著わした『信経・教義要略』、ヘルソンの著書、その他このキリスト教界に有益な類似の書籍の印刷に全力を挙げて努力するようにとの結論に達した（『キリシタン研究』

第十六輯の José Luis Alvarez Tardieu 編注、井手勝美氏訳「日本イエズス会第二回総協議会議事録と裁決（一五九〇年）」（二五〇頁）

すなわち、一五九〇年に国字で翻訳し終わっている書物の中に、『信経・教義要略』が含まれている。もともと、これが一五九二年ローマ字版『ヒイデスの導師』の原稿なのか、それとも一六一一年国字版『ひですの経』の原稿なのかはわからず、両版共通の原稿であったかも知れないが、と言って両版が辞句、内容上どの程度密接であったかが不明の現在、刊行年との近さからローマ字本の初めの原稿が国字本であった可能性を右の記録の中に見ようとするのである。

さてローマ字本『ヒイデスの導師』の初めの原稿が国字本であったのではないかと推測する内部徴証に筆を進めると、ローマ字綴りの本文中には、そのもとの原稿が国字であり、漢字の読み違いに基づくかと考えられる奇妙な言葉がある。それは次文に見える「わらののかま」である。

neya no xitone toteua, vara no facama nari. (二〇五。寢屋のしとねとしては藁の袴なり)

これは憶測するに、原稿には国字で「藁の被（ふすま）」とあったのではなからうか。その「被」を「袴」と誤読した（あるいは原稿において誤記していた）ことに基づくおかしな表現ではないかと思われる（「被」は『黒本節用集』等にある）。このような現象は始めの原稿が国字本であったと考えることによって納得しやすい。なおここに該当する原スペイン語は「藁の袴」とは訳せず、「寝袋」の意に解され、したがって「藁のふとん」の意の「藁の被」の方が原義に近い（六〇右八）。「藁の袴」のままで結果的に誤訳と言わざるを得ないであろう。

ところで次文の「くだる」も右と同様に解してよいかというと、それは早急すぎる。

migui no danguixa murasame no cudaruga gotoqu, curô no cazu no xinogui tamai te nochi, (二二三。右の談義者、村雨のくだるがごとく、苦勞の数を凌ぎ給いてのち)

『日本国語大辞典』には、「蜻蛉日記」から雨がくだる例が挙がっているが、中世の文献にも「お湯殿の上の日記」の大永八年（一五二八）八月十一日の条に、

雨いさ、かくたるはかりにて、やかてはる、（『統群書類従補遺三』）という例があるので、必ずしも国字本の原稿の「降る」を「ふる」と読まず「くだる」と読んでローマナイズしたのだとは決められない。

なお姉崎博士が、

譬えば、水を竹に変ずることは、下地なくして作るよりも易きこと也（五七五頁。ローマ字本では六〇七六）

と翻字して、「（水は）木（の字）を読みちがへたか」と脚注されたのは、一見、国字本の原稿の漢字を読み違えた例に入りそうにも思われるけれども、原スペイン語では、

たとえはキリストが（或る人の）結婚式での奇蹟として水を葡萄酒に変えられた時になされたように……（二四左 10）

とあるので、天草版は「水を酒に変ずること」と綴ろうとしたと見るべきで、姉崎博士はローマ字の sage（s は長い）が tage に紛らわし

かったために読み取り方を誤られたのであろう。『ヒイデスの導師』にはローマ字活字の不明な所がしばしばあって、特に右のような場合には原スペイン語との照合が不可欠となる。一步譲って、ローマ字綴りが明らかに *page* であるような場合であっても、原スペイン語との照合の結果、「さけ」の方がふさわしければ、ローマ字綴りの上での誤植としなければならぬであろう。

### 九、分かち書きについて

本書では格助詞の「が」「の」「に」「を」「は」などを直前の体言と一綴りにせず、分かち書きにすることを本則としている。このことに關しては、本書の後に刊行された天草版の『平家物語』についての土井博士の調査がある。それによると、卷三の終わりあたりの二二〇頁前後までは分かち書きをしているが、その後（と序文）は続けて書くように改めている（『吉利支丹語学の研究新編』五六頁）。つまりイエズス会における日本語ローマ字綴りの、この点での方針の変更は、一五九二年の途中（遅くとも同年十二月十日）なのであって、『ヒイデスの導師』は古い綴り方に、時期的に属していたのである。最初イエズス会がなぜこれらの助詞を離して書いていたかを想像するに、おそらく機能的にロマンス語の前置詞に近いと考え、一語扱いということで体言と切離して明確化したのであろう（「を」を以て）の場合に *nomote* と一綴りにしているのも、これ全体で一つの前置詞のように見做したからであらう。cf. 山田孝雄博士「漢文の訓読によりて伝へられたる語法」二七七八頁。もっともこの考え方が徹底しているわけではない。が、そのうちに日本語に対する観察が進み、日本語の膠着語としての性質に気づくようになって、これらの格助詞を体言と続けて記す方が、日本語として（読む場合、話す場合に）実際的であり、スマートであるとして続けるようになったのであろう（土井博士は前述の分かち書きの変更を、イエズス会の日本語研究における不断の成長性のあるわかれの一つと認められた）。この点から見ても、本書はこれらの日本語学

習のための初期産物と言えよう。

### 十、バ行音とマ行音との交替現象について

中世語におけるバ行音とマ行音との交替現象については、天草版の『平家物語』を主たる対象に据えて、拙稿「中世国語におけるバ行音とマ行音との交替」（昭和34年3月、京都市立高等学校国語研究会「研究会誌」創刊号）で述べたことがあるが、この旧稿で述べたのとほぼ同じような「B→M」化現象が『ヒイデスの導師』においても見られるようである。ただ、天草版の『平家物語』において原拠本との関係によるなどの理由によって、大略「さむらいさむらいさむらい」の経過を辿る「侍」の語が、『ヒイデスの導師』ではB形の *salurai* であるが（一五八11、二六八1、三〇一5）、これは「サントスの御作業のうち抜書」の場合の両形混在とも、また異なっている（福島氏前掲書四〇二頁）。なお『ヒイデスの導師』においてB、M両形の見られるものに「選ぶ」があるが、初めの一例だけがM形で（八23。 *yeani*）、あとはすべてB形である（二一八10に未然形。他はすべて連用形で、二〇八6、二二六14、三二二7、三二七8、三五七7、四二八11、四三五7、四七八16、五二三21、五三三1、五五二13、五七二20に *yerau* がある）。ちなみに、この動詞は旧稿で触れたように天草版の「イソツツ物語」ではB形で（四二九19）、天草版の『金句集』の本則（文語体）でもB形（一七三則、二一八則）、「心」（口語体）ではB形（二二一則）とM形（二一八則）とであって、「たつとむ」（尊）に比すれば、M化への抵抗度が強い。

### 十一、九州方言の有無

山本氏は『ヒイデスの導師』の中に、「九州方言が処々にみられる」と述べておられるが、具体的には示されていないので、氏が九州方言

と認められたものについて、一つ一つ検討していくことができない。  
また姉崎博士は、本書を「信心録」の書名のもとに翻字され、他の『捨世録』(コンテムツス・ムンヂ)、サントスの御作業並にマルチリヨのことわり」と合わせて、「切支丹宗教文学」と題して刊行されたが、その中の論稿「キリシタン宗教文学総説」において、「文章の上に九州風の現れといふべきものはない様である」(二〇頁)と述べておられる一面において、冒頭の「序言」においては、

現代用法と異なる清音、濁音、半濁音が可なり多い……此等の中には当時の語法もあらうし、又九州音もあるらしく(ラチン字に書きかえる助手等の方言が混入した為か)、何れも語学上の材料にならう。その外に九州音と思はれるのは、ナシカワ、ナンビトなど少数あるが……此等、方言らしい分の多い箇處と少い箇處があるのは、蓋し書換を分担した為であらう。(二頁)

とも述べておられる。しかし博士が九州方言らしく思われた「なしかわ」(二七五二三)等を当時の九州方言であると確認することは、ほとんど不可能に近いのではないかと思われる(「なしかわ」については国字本の原稿にたまたま濁点が打たれずにあっただけかも知れない。類例に「いみじき」を清音に綴る二六九一三の *imixiki go quatō ni arazu ya?* や、「信じ」を清音に綴る六〇九一〇の *icadece xixi garaki coto to ua zōzu beqi ya?* などがあるが同様に考えられる)。「ヒイデスの導師」の用語の中に、九州方言であると言えそうなものがあるかないかを、『日ポ辞書』のシモ(九州)の注記や、ロドリゲスの『日本大文典』の九州方言の箇所の記述を手がかりに眺め渡してみても、あるとはなかなか確言できそうにない。むしろ当時の中央語である京都地方の言葉で綴ることを本則としていたように思われる。例えば、以下に引く文中の「かいこ」(卵)や、「いぎ」(棘)なども京都語であつたと考えられるものである。

Mendori mo, vondori mo morotomoni **caigo** no atamuru xirno  
no cauriganari ni xinggu mono nari. (一二三—一四二。雌鳥も雄鳥も諸共に、かいこをあたたまる辛勞を代り代りに凌ぐものなり)  
右の文中の「かいこ」は、『日ポ辞書』によれば、カミ(京都)では

「卵」の意で、シモでは「蛭」の意であるが、ここでは「卵」の意と解され、したがって九州方言ではないと考えられる。そして「蛭」の意の語は清音形の「かいこ」で次のように使われている。

Mata mi ni fururu mono no yauaraca ni totonoye tamanan tameni,  
bechi no chisagaki muxi no gosacu nasaruru nari: core sunauchi  
**caico nari.** (五八二一—二三。また身に触る物を柔らかに調え給わん為に、別の小きき虫を御作なさるるなり。これ即ち、かいこなり)  
「かいこ」(蛭)は、『日ポ辞書』によれば、シモでは清濁両形の「こくカミ」では清音形であつた(『一橋論叢』昭和三十三年一月号の亀井孝氏「捷解新語」小考)。したがって九州方言の可能性が全くないというわけではないけれども、前述の「かいこ」(卵)とあわせて考えれば、九州方言であるという蓋然性は乏しい。

「いぎ」については、『日ポ辞書』に「棘」の意の語がカミでは「いぎ」あるいは「いばら」であり、シモでは「いげ」あるいは「いどろ」であるように記されている。「ヒイデスの導師」には *ayū* (または *yūni*) *no canuri* (三一七一〇、三一九三、三三六二〇) あるいは *ibara no canuri* (三三七二、四三四二〇、四四〇一五、五〇〇一五、五〇七二一、五〇八八) *ibara* (三三七三頁に三例) の用例が見えるが、「いげ」や「いどろ」は見つからないので、「棘」の意の語に関して、九州方言は用いられていないと判断する。ちなみに、「いばらのかむり」については『日本国語大辞典』は、「イバラの枝で編んだ冠。特にキリストの受難のおりに頭につけた冠」と説明し、一六二二年版「ロザリオの経」等から挙例しているが、いま参考までに、ヴァチカン文庫所蔵のバレット自筆写本集の中の「我が主キリスト御受難の道具に関する若干の対話」から、「冠」の箇所を引こう。

この棘の冠は おん主ゼズ・キリシトに 帝王と侮りおん頭に緊しく打ち込みたる道具なり 我ら人間の慢気の惡を省みさせられ 送らせられんおん為のしるしなり (前掲書九三頁。森田武博士翻字。なお日本思想大系「キリシタン」書排耶書「二八四頁頭注参照」)

そのほか、『日ポ辞書』によれば「毒蛇」を意味する語が、カミでは「くちはみ」、シモでは「ひらくち」であるが、本書においては「ひらくち」は見られず、*cuchifami* (一一一13、六六9)と*docuŋa* (六五1、六六23、六七3568、一九六1620、二〇七1415、二二八4614、二五二23、二七八22、二七九113)が用いられている(ほかに蛇の意の「くちなわ」が一五18に、「だいじや」が六七12152023、六八265、二五〇21、四四九23にある)。というような次第で、九州方言であると確認できそうなものを、語法等に関する事象をも含め、本書の全般にわたって求めても容易に得られないのであるが、ただ次文の「かげ」は九州方言である可能性が幾らかありはしないかと思う。

*Vaga dexi to narixi fitobito ua finxen naredomo, carera ga faccot no cague uomo hannin yori chōdai sasū bexi to notanō beqi to vonō nari.* (二一九15、18。わが弟子となりし人々は貧賤なれども彼等が白骨のかげをも万民より頂戴さすべしと宣うべきと思うなり)

姉崎博士はこの「かげ」に対して「かけはし、断片」と注されたが、このような意味の語は『日ポ辞書』等では清音の「かけ」であって、濁音「かげ」に「かけら」の意のあることをうかがわせるような記述は当時の文献に見いだせず、この濁音形は九州方言である可能性がある。だが他面、当時の九州方言であることを確認する手だてにも欠く。ただ僅かに動詞「欠く」の濁音形「かぐ」が大分等に存在し(『日本国語大辞典』による)、本山桂川氏著『長崎方言集』一八一頁に「カゲ カケ(欠)」とあることが、このような憶測を誘うのである。なお前掲文のあたりに相当する原スペイン語の意味は、

……わたしの弟子達は、たとえ貧しい出身の者共であっても、大いなる尊敬をもって遇せられて、その結果人々が丁重な供物を供えて、これらの骨、つまり骨粉を礼拝することをわたしは望むのである。(二〇八左48)

のようであって、両者を対照すれば天草版の「白骨のかげ」が「白骨の細片、つまりかけら」をあらわしていることは確かである。

## 十二、開合や四つがなに関して

オ段長音の開合や四つがなに関しては(殊に前者に関して)、混同例が幾つか見つかる。ただし、姉崎博士が開音字の「次第程当」を宛てられた *xđai leio* (三一9等)は合音の「次第梯登」(『塵芥』。cf. 大塚光信氏『リヤード懺悔録』補注九頁)を、また合音字の「陳報」を宛てられた *chimo* (二九二2等)は開音の「陳防」(『落葉集』、『伊京集』)をそれぞれ宛てるべきなので、このようなものは混同例には入らない。ただ、混同しているものの中で、他の文献でも混同しているのがあり、それを開合、四つがなの場合について各一語ずつ示そう。

開合混同例。開音形が期待される「而じて」が *xicōite* と合音形で出ている(二二五5)。このような合音形 *xicōite* は、本書の後に刊行された天草版の『金句集』にも二例見え(四五則、二五六則)；早く亀井氏が注意されたが(『国語と国文学』昭和十四年三月号、二八三頁下段)、本書よりも先に刊行された『サントスの御作業のうち抜書』にも、正しい開音形四例と共に合音形一例がある(これについての調査は高羽五郎氏の『サントスの御作業 翻字篇II巻、2』の附録二八頁による)。

四つがな混同例。四つがなの混同例の一つに「味」がある。この語は「アヂ」が正しいのであって、本文では混同していないようであるが、和らげにおいては正形 *agi* のほかに、*aji* が「*Fiacumi no vonijū*」の説明文「*Fiacu no aijūai aru xocubut*」の中に見られる。もっとも、この語は他の中世文献にも混同形が見え、静嘉堂文庫蔵『運歩色葉集』の「味」のふりがなは「アシ」のごとくであり、天理図書館吉田文庫蔵の『日本書紀神代抄』に、

アジワイテトハ、ヲシヘテト云心也(一二三オ)

とある。そして後者は清原宣賢自筆の『日本書紀抄』(一五二六年)における、書紀本文「教」字の傍訓「アジハイ(て)」(上二五オ)に基づくことが明らかであり、宣賢の傍訓の由来を尋ねることによって、これはさらにさかのぼる可能性があるであらう。

## 十三、ローマ字綴りの意味のとり方に関して

翻字とも関係するのであるが、ローマ字綴りの意味のとり方の紛らわしい場合があり、その例を一、二とりあげよう。

〔1〕第三序文に次のようにある。

Saredomo cono xo ua cotouari nago (nagô の誤り) xite, bu vouoi naruga yuyeni, fito mina core uo mi ni tazzusaye, yomi cocoronin to suruni, itomaqiarazaru coto uo cayerimite, ima mata core uo riacu xite chijisagi qio to nasu mono nari. (されどもこの書は理長うして、部おおいなるが故に、人皆これを身に携え、読み試みんとするに、いとまあきあらざる事を顧みて、今又これを略して小き経となすものなり)

姉崎博士はこの文の vouoi を「大い」と翻字されたが、キリシタン資料では「大い」の意の時は vo: と綴られるのが通例であり、vouoi ならば「多い」の意のはずである(『国文学攷』三十七年五月号の、浜崎賢太郎氏と共著の「オ段音に後続する『ほ』の長音化過程」参照)。また、森田博士によれば、キリシタンのローマ字資料においては「大きな」などの形が圧倒的に多くて、音便形の「大いなる」などの形はほとんどない(岩佐正教授古稀記念論攷行会『国語学国文学論攷』所収の「大きに」と「大いに」)。そういうわけで右の文中の vouoi naruga は「大いなるが」とせず、「多いなるが」と翻字する方がよいように思われるのであるが、文法的にどう見るといふ点で気にならないこともない。それは「大いなる」ならば形容動詞の連体形であるが、「多いなる」の場合にはどうなるか。形容詞の連体形「多き」のイ音便に断定の助動詞「なり」が接続した形と解すれば、解決できるかも知れないが、「多きなり」「多かるなり」でなくて「多いなり」という形が、当時ほかにも用いられているかどうか調査の必要を感じる。なお原スペイン語には第三序文の右以前の十数行がなく、「部おおいなるが故に」とびつたり適合するものもないが、このあたりの原文の意味は次のようである。

いろいろなまじり合って論じられているので、記憶に止めやすいように、章に分けて、その内容の要約を作る必要があるように思われる。

天草版において、右のような原文の意味を意識して「部おおいなるが故に」としたとすれば、その「おおい」の意味は、やはり「大い」よりも「多い」の方に解されるのではないかと思う。

なお一五九六年にローマ字で出版された『コンテムツス・ムンヂ』を姉崎博士が翻字された中にも、右と同様の vouoinaru を「大いなる」とした次文がある。

いかに人々、常住死すべきことを恐れ慎むに於ては、甚だ危き事と大いなる恐れをのがるべし(『切支丹宗教文学』九五頁)

この書の場合は、一六一〇年に国字本が刊行されているので、それによって右の箇所を見ると、

いかにきやうだい、つねにしすべき事をおそれつゝしみ、いまか／＼とおもふにをひては、いかほどのあやうき事またはおほくのおそれものをがるべし(『日本古典全書』『吉利支丹文学集』上二五頁)とあって、ローマ字本の vouoinaru は国字本の「おほくの」と照応するから、この書の場合も「大いなる」と翻字せずに「多いなる」とすべきであると考ええる。

〔2〕本文の三四四5-14に次のようにある。

Cuda no jûfachicagiô nimo Martyres no sata uo naxitaru naca ni, cono gui uo xôxô noxexi nari. Sarinagara cono daimocu ni tçuite jen ni suguretaru gacuxa tachî ami tate tamô xoïacu uo miru ni voiteua, aqiru beqi coto dôri no maye nari. Sono ichiquan uo cotogotocu docuïu xezu to yûtomo, sueoxi naritomo, cocoro uo tomete yomu ni voiteua, sore ni comoru jenu no fôxu, Sanetidade no cõbaxigi niuoi uo cagui tatemacurite, aqire fate yotocobi, ……(くだんの十八か条にもマルチレスの沙汰をなしたるなかに、この儀を少々載せしなり。さりながら、この題目について

善にすぐれたる学者達、編みたて給う書籍を見るにおいては、あきるべきこと道理の前なり。その一卷を悉く読誦せずと言うとも、少しなりとも心をとめて読むに於いては、それに籠もる善事の宝珠、サンチグアデの香ばしき匂を嗅ぎ奉りて、あきればはて喜び……

この中の *el gozo* は、漢字で書けば「呆きる」(アキレル意の下二段活用動詞の終止形)であろうか、それとも、「飽(または、厭)きる」(満足スル、またはイヤニナル意の上二段活用動詞の終止形)であろうか。すこし後に下二段「呆きる」の連用形が出ていたので、前者が該当するかと思われるが、後者でも意味が通じそうである。が、もし後者の「飽きる」の方であるとすると、この動詞は、当時普通には四段に活用しているので、上一段活用の文証として、はなはだ注目すべきものとなる。と同時に二段活用の一段化現象としても、「ヒイデスの導師」には「用いる」四例(一一1518、一二18、三二156。いずれも連体形。なお二六二三に「用ゆ(べし)」があり、九一21、二〇六21、三六六一、四七二13に連体形「用ゆる」があつて、一段活用と二段活用とが併用されている)があるくらいなので、注意をひくものになる。このあたりの原スペイン語の意味は次のとおりであるが、天草版の邦訳は原典から大分離れているようであつて、スペイン語の側からこの問題を解決することは困難に感じる。

マルチレスの善徳と堅信について、また殉教者が数えきれぬほど大勢いることについて論じた同じその所に書かれた第十八章にも、一部この事が明らかにされている。その事は殉教者の神聖性の輝きによるばかりでなく、殉教の血とこれらの苦痛の偉大さによつて更に一層キリスト教の宗教性を証提立て、飾っているのである……(西語文約20行の和訳を省略)……わたしは全巻読み通したのではなくて、ほんの六、七章読んだだけなのだが(もしかしして神様のご判断とお気持ちがあったのかも知れないが)、わたしはこれほどの美徳のゆたかさ、これほどの恩恵の豊富さ、この讚美の原因となつたサンチグアデのいともやわらかな芳香のする開化を見ては、ただただ(感嘆して)驚きはてるばかりである。(一一八左61)

右の傍線部が日本文中の「あきる」に相当するので、強いて言えば、

「満足する」意に邦訳したかの感がなくもない。もしそうだとすると後出の「あきれ(はて)」とは別語ということになる。「日ポ辞書」の複合動詞「あきれはて」の意味は「ひどく驚いて呆然自失の体になる」であつて、単独の「あきれ」の場合と同様に、喜ばしい情況の下では用いられないかのように看取されるが、「ヒイデスの導師」の「あきれはて(喜び)」は感嘆する気持が含まれていて(波線部のように原スペイン語と同義。なお既掲の、孔雀の美しさにめでてアキレて立つ、という用例文の場合も、すばらしさに感嘆する意である)、このような喜ばしい状態の場合での「あきる」の早い例は、「岩波古語辞典」に引く「浜松中納言物語」に左のように見られる(「日本国語大辞典」は黄表紙から挙例)。

あきれいたきまでもおもひよろこびたること、たとへむかたなし

(岩波大系本。二八四頁)

右と同様な例として、ここに問題とする「あきる」の意味を考えるならば、すなわち「すばらしさに驚く」というような意であるとするならば、下二段「呆きる」の終止形と認定することができようかと思う。なお助動詞「べし」への接続については、本書における二段活用動詞から「べし」へ続く場合の活用形として、終止形(いわゆる文語)から続く例が他にもあつて問題はない(詳細は省略)。

#### 十四、「日ポ辞書」との関係

『日ポ辞書』の中に本書から用例を採つたものがあるかどうかについては、出典名として本書を明記したものはないけれども、既述のように孔雀をめだた一文が酷似していて、『邦訳日ポ』八六二頁の森田博士指摘のとおり、『日ポ辞書』の引例が本書(あるいは本書の原稿)に拠ったことは疑いあるまい。そのほかに同様のものがあるかどうかについては、本書の用語について一つ一つ『日ポ辞書』に当たっていないので何とも言えないけれども、あるいは『日ポ辞書』の用例として本書から採録されたかも知れないと思われるものを、気のつく範囲であげ

てみよう。

〔1〕いろを着る。

本書に「いろを着る」の用例が左のようにある。

Core sunauchi sôsô ni iro uo qiruga gotoqu nari. (四七五七。)  
れすなわち葬送にいろを着るが如くなり)

右に関して、和らげは、

Sôsô (Sôsôの誤り) ni Iru (Iroまたはiroの誤り) uo qiru. i. Dabi no  
toqi qiru qiru mono.

と説明し「日ポ辞書」(補遺)のIroの条にはIrouo qiru.の用例を示している。なおこのような意味での「いろ」という語は、文化十年(一八一三)の対馬方言の字引語釈「日暮芥草」にも、左のように記されている。

いろ 喪ある者の服を素禪といふ いろの称は倚廬イロ 字彙ニ倚廬ハ  
居服という事成べし(葬式に服する白衣)(吉町義雄氏「九州のコトバ」  
三六九頁)

それはともあれ、『日本国語大辞典』には喪服の意の「いろ」の用例を、源氏物語から咄本に至るまで挙例しているので、『日ポ辞書』の先掲のような短い用例文では、出典が本書の可能性があったところ  
で、確率は高くはないであろう。

〔2〕一紙半銭

同様に『日ポ辞書』の用例文が短いが故に出典の確度がそれほど高くないものとして、左のixxi, fanxen…がある。

ficu fucu jûman no chôja no tonari no fito ni ixxi, fanxen nomo  
fodooosazumba, gendon to ittu bexi : (五六六21。百福充滿の長者  
の、隣の人に「一紙半銭をも施さずんば、慳貪といつべし」)

『日ポ辞書』のIxxi.の条を見るに、Ixxi fanxeno jifunomo fodoooxe.という用例が示されている。例文が短い上に百パーセント一致しているわけではないので、特定の出典を持たない、辞書編修過程での作例であるかも知れないけれども、「一紙半銭(を)施(す)」という共通語句に

よって、本書が出典である可能性が幾分か見られるかと思う。

〔3〕朱の血潮に染む

次例の age no chixiu ni somi もまた同様の可能性が潜んでいるかも知れない。

nagaxi tamô von chi vomotte von mi ua goxiqixin no age no chixiu ni somi tamaie (二四三16。流し給う御血を以て御身は御色  
身の朱の血潮に染み給いて)

同様の表現は、なお、二四七4、二六八15、四四〇20、五一〇20にも見られ(ほかに二七五9に「朱の血潮になり」の例があり)、本書における一種の慣用的表現かと考えられる。『日ポ辞書』の名詞 Age. の用例文に、Ageno chixiu ni somu. があり、その説明には「真赤な色に染まる。または比喩として、ひどく血を浴びることをいう」とあるが(動詞 Somi-cayeri の用例文の Ageno chixiu ni somicayera. の説明は「血で染まり、血まみれになった」)、本書の用例はすべて『日ポ辞書』の言う「比喩」としての「血潮」の意のものであり、「例も本義だとする「千入」(何回も染まる意)の用例がないので、果たして『日ポ辞書』のこの用例文が本書から採ったものか否か、その判断はかなり躊躇される。がしかし、また一面『日ポ辞書』の右の説明の前段は単に語源的な考えを示してみたにすぎないと見るならば、『日ポ辞書』中に同様に考えられそうなものがあるかないかは未調査)、本書の用例がここに採られていると見ることで、可能性も少しはあることになろう。

## 十五、諺

森田博士は論稿「日葡辞書のことわざ」(『国文学攷』三十七年五月)において、

キリタン資料には、一般にわが国のことわざが少ないのであるが、その中で最も多く含むのは日葡辞書である。多いとはいっても、約五〇例に過ぎないのであるから、当時行われたことわざの豊富な資料とまでは言えない。しかし、

中にはまだ俚諺辞典の類にも収められていないものがあり……(二〇二頁)

と述べられ、さらに「日ポ辞書」以外のキリシタン資料にも言及して、キリシタン資料は、キリシタン宗門書とそれ以外の教外書とに大別することができる。まずヤソ会版の宗門書を検するに、一般に金言ことわざともに少ないと言えるのであるが、その両者の間ではことわざの方が少ない。即ち、金言は「サントスの御作業の内抜書」に一〇例、「ヒデスの導師(信心録)」に四例、「コンテムツス・ムンチ(ローマ字本)」に一例、「ぎやどべかどる」に一例はと拾えるけれども、ことわざの方は「ぎやどべかどる」に次に示すようなもの約九例が見えるだけで、その他の書には見えないようである。(二〇八頁)と説かれた。しかし「ヒイデスの導師」にも諺は三例ほど拾うことができる。すなわち次のものである。

① *Cotouaza ni iuagu: qinguin vomotte baitocu xerarruru mono ua qinguin nari to iyeri:* (四九〇10。諺にいわく、金銀をもつて買得せらるるものは金銀なりと言えり)

② *Saru niyotte cotouaza nimo vonxó ua iua nomo varu to iyeri: nata vonxó ni ayebea, tegaxe, axigaxe, cubicaxe no xeme nomo cayeri mizu to iyeri.* (四九三20。さるによつて、諺にも、恩賞は岩をも割ると言えり。また、恩賞にあえば手枷足枷首枷の責めをも顧みずと言えり)

ただし、これらの諺は「日ポ辞書」に見えず、国内文献にも見いだすことができないので、わが国の諺なのか、かの国の諺なのかを検討しておく必要がある。このことに関して原スペイン語に当たっていたいた近松氏の教示を左に掲げる。

パラグラフの切り方が和西全く異なっている、どれと対応するかを見つけるのが簡単でないが、①のあたりの原スペイン語を和訳すると次のようになる。

(世に言われているように)金のぬうち(金)でしか評価できぬわけだから、キリストの御血はキリストの血でしか評価できない。

そんなわけで、何か罪を犯すことで、魂が失われる時にすなわち、キリストの御血がばらまかれることになるのだ。(一六八左16)

傍線部の直訳「金が値するものは金だ」を、日本語らしい表現にしようとして、「金銀をもつて買得せらるるものは金銀なり」と誤訳してしまったと考えられる。おそらく原文の真意は「世にインフレがあるから金は通貨で評価することができず、金何グラムという具合に言う以外には評価できない」ということであろう。換言すれば、「金とキリストの御血は相対的評価ができず、絶対評価をすべきだ」ということらしい。こうして見ると日本語ローマ字版は、スペイン語原典に比してキリスト教学的でないと言える。

次に②のあたりのスペイン語を和訳すると次のようになる。

ところで慈善の善果について言えば、それは厳すら割るという。また一旦その善果を知った人は、己が心を捕まえて離さぬ牢獄を見る(直訳「見た」のだそうである。(一六九右22))

この前後の二箇所は、天草版はスペイン語原典から大分離れて論旨が違ってしまった。とくに②の部分を含むローマ字本四九三16―四九四3の所は原義に近いのは二、三の部分だけである。四九二16―四九三2は日本語ローマ字文では僅かに十行であるが、これに相当するスペイン語原文は数倍あって、愛と慈善についての説明を日本文は全部省いて「ここには載せず」としている。つまり、キリスト教哲学の部分は抜き去っており、訳も随分変えてある。いわば日本人向きのダイジェスト版にしてある。

以上の近松氏の懇篤な説明によつて考えると、結局①②の諺の由つて来たる源は、スペイン語の原典に発していることとなる。たとい西日両語に熟達していたとしても、原文を適宜省略し整合する以上は原文に忠実な邦訳には必ずしもならないけれども、原スペイン語との照合の結果は、邦訳者が原文の表現とは全く無関係にこれらの諺を引いたのでないことが明らかである。もし訳者が自由に諺の類を引くとすれば、たとえば②の代わりにほぼこれと同内容を意味する「重賞之下必有死夫」(「三略」を以てしてもよいはずだと思われる。「三略」は広く読まれていて宗二・宗和奥書「三略私抄」(亀井氏蔵)に、この句は、恩賞ヲアタユレハ死夫カアルソ(高羽氏翻刻本七三頁)

と抄されているが、天草版の「金句集」にも、



Qioxôno (Qioxino の誤植) motonua canarazu qenguio ari: chôxô no motonua canarazu xifu ari.

Cocoro. Cōbaxi yebano xitanua vuoga cacariyasû: vonuo atçu suu fitono motonua chûo tçucusu monoga atçumaru. (一一七則)と見えていて、こちらの方が遙かに身近かであったであろう。なお①に対する原スペイン語の「金のねうち」は金でしか評価できぬ(金が値するものは金だ)に関して付言すると、これと類似の表現が「ルース世界ことわざ名言辞典」にあり、フランスの諺として「金の値段は金の値段そのものである」(アントワヌ・ロワゼル「習慣法」一六〇七年)と見えるが、訳者(島津智氏)の注は、「金の値段で他の金属の値段が決まることをいう」としている。フランスではこの注のような意味であるとするならば、表現は似ているが真意は充分離れているように思われる。

## 十六、難解語「のうぢゅう」

次文の「のうぢゅう」は本書の中で最も難解であると思われる語である。

Cono aratamari yô no miru ni, Deus no go qenhô no yve yori xidai no bujini vosame tamauan tameni tçuyosa, youasa, nasari, votori no naqi yôni, Elemento fitorçu zzutçu ni nôgû no sangatçu. qizutçu no sadame voqi tamô mono nari. (四九二五〇<sup>4</sup>) この改まり様を見るに、デウスのご憲法の上より四大を無事に治め給わんために、強さ弱さ、優り劣りのなき様に、エレメント一つづつに、のうぢゅうの三が月づつを定め置き給うものなり)

この「のうぢゅう」に対して、姉崎博士はかりに「能住」と宛てられたが、このような漢語は「大漢和辞典」にも「日ポ辞書」その他にもない。右の文の所は原スペイン語では、

しかし、それら(四季)はお互の間では相対抗するものであるが、幾つかが他のものと比較して一層強力になって、互に衝突しあうというようなことがない

ように、創造主(＝神)はそれぞれに等しい時間を割りあてて、それらの力を同等にされたのである。つまり落ち着くところの長さは三か月になるのである。(一四左4)

という意味であつて、「そこ」にうまい具合に(安心して)落ち着く(ところの)というのを「のうぢゅう(の)」と訳したことになるようである(なお、「この改まり様を見るにデウスのご憲法の上より」は邦訳者がつけ加えたもので原スペイン語になく「エレメント」もない)。さてそこで問題は「そこ」にうまい具合に落ち着く(こと)というように意味をあらわす言葉として、邦訳者が「能住」というような漢語を新造したのかどうかである。意味的には「能住」という字面が原スペイン語の意味する所と通い合うようにも感じられるけれども、一般に通用していない漢語をあらたに創造するということは、訳者の序文に言う「媚びたる言葉を除き世話に綴る」趣旨から見てもうなずけない。とすれば、nôgûは何らかのまちがいではないかと考えられてくる。しかし開合や四つがなのまちがいかと見ても該当しそうな語が浮かびあがらない。そこで前後の文脈から考えて、平凡に nengû (年中)の誤りと見ることにすると、和らげの、

Nengû. Toxi no vohi.

の、本文で該当するのがこれではないかと思われる。そして、そのような目で今一度ローマ字の本文に立返って眺めると、noは行末でbûは行頭であるが、noがやや不鮮明で、あるいはこれはneではないかと思われる(行末のnoの類例は四のななどに見られる)。もし本来nengûのつもりであったとすれば、難解語「のうぢゅう」(能住)は雲散霧消してしまふ。存在の確認できない語「能住」よりも、「ねんぢゅう」と読み取る(もしくは「ねんぢゅう」と綴るべきであったのを誤ったと見る)方がよいと考えるのであるが、いかがであろうか。

## 十七、その他の言葉二三

「一」「いざつ」について。

Cano fitobito ua go Passion no miguiri nigue chirri tamaite, go xixò uo sute tatematcuraruru coto uo gosoxei no nochì vasure tamaite, cayette xitaxiqi gosò uo Magdalena vomotte tçugue tamò mono nari. Sono gosò ua vaga voya to, nandachi no von voya ni agari, vaga De'to, nandachi no De'ni agaru nari to notamò nari to, S. Ioan. 20. ni miyetari. (五三六10-17。かの人々は御パシヨンのみぎり、逃げ散り給いて、御師匠を捨て奉らるることを、御蘇生の後忘れ給いて、却って親しきごさうをマガダレナを以て告げ給うものなり。そのごさうは我が親と、なんだちの御親にあり、我がデウスとなんだちのデウスにあがるなりと宣うなりと、サンジヨアン二〇に見えたり)

右の「ごさう」という語に対して、姉崎博士は「後相か」と注されたが(前掲書五四〇頁)、しかし「後相」というような用字例はない。文脈とオ段長音の開合とから考えて、「お指図」とか「御命令」とか「仰せ」とかの意味の「御左右」であろう。この語の用例は『捷解新語』に左のように見られる。

①(客)あすわくもつきがよう御ざるほどに、あいのしままでわ、つかしられうと、めでたうこそ御ざれ。よのあけんうちに、しゆつせんなるやうにさしられ。

(主)御さうのごとく、あすわてんきよそうなど、(主)もとのものも申はごに、さうさうこそしゆつせん申うすれ。(三本対照捷解新語本文篇、二二五頁。ただし濁点等は「釈文・索引・解題篇」四五頁を参考にした)

②せししや(拙者)乃(と)さくばんげふ(下釜)つかまつり候。御さうのためさうししやちやう(書状)もって申るべき候と………(三三三頁)

③ただいまごうめ(遠目)のあんないに、にほんふねにそうまいり申候よし申され候。さだめてこのごう(中)より御はなしなされ候御ししやぶねにて御さ候や。御さうのため申いれ候(三八三頁)

右の原刊本の①「御さうのごとく」は、改修本では「おおせくだされ

まするたうり(通り)と変えられているが、②③の書簡文の用例は改修本でもこの語が使われている(改修本にはなおかに二例新しく使われている)。さて『ヒィデスの導師』の前掲文を原スペイン語と対比すると、日本文はすくなく省略が多いが、左の傍線部の「伝言」が「ごさう」に相当する。

キリスト様が(悪女)マクダレーナにお示しになった憐みの情はどれほど偉大であつたのだろうか? 神の大きいなる愛があゝの悪女の心に感応し、彼女は己の罪深さをしみじみと悲しんだのであるから。しかもキリスト様はあんなにも簡単にあの悪女の罪をお許しになったのであるから………そしてかの罪深い聖女をもつていともやさしき伝言をかれらの所へお送りになった。そしてその伝言は「わたしの兄弟達の所へ行け。そしてかれらにわたしはわたしの父であると共に汝等の父であるわたしの神、つまり汝等の神の御許へ昇って行くと伝えよ」と述べていた。(一八五左18)

右によつてgosòは「御左右」と翻字すべき言葉であることが確認できると思ふ。

【2】「ひにん」(および「かびやう」)について。

França no teivò nite maximas S. Luis ua goyquò ni cacauari tamauazu xite, caceutaru tocoro ni amata no finin uo yobi atçume tamaite, sono axi uo arai, nogoi tamò nari. Theodosio to môsu Roma no teivò no cõjiã ua biõnin no tocorodocoro uo meguri, giqui ni gnegio no gotogu, tçucanare tamò nari. Mata Vngaria no micado no fimemiya nite maximas Sancta Isabel ua biõnin ni miyazucnei tamò nomi narazu, raisò nado ni cursuri uo tçuge tamò nari. Galicano to môsu taixò ua ..... cano taijin ua finin no axi uo arai, fandai uo totonoye, chõzu uo sasague, yudan naqu biõnin ni miyazucanaruru coto fitoyeni yatçuco no gotogu naru uo fito mina nite giy no vomoi uo naxeri. (一一〇八13-110九8。フランスの帝王にてましますサンルイスは、御威光にかかわり給わずして、隠れたる所に数多のひにんを呼び集め給いて、

その足を洗い、のごい給うなり。テオドシヨと申すロマの帝王の後宮は、病人の所々をめぐり、ぢきに下女のごとく使われ給うなり。またウンガリヤのみかどの姫宮にてましますサントイサベルは、病人に宮づかい給うのみならず、癩瘡などに薬をつけ給うなり。ガリカノと申す大將は……かの大人は、ひにんの足を洗い、飯台をととのえ、手水へ原文のズはツの誤り」を捧げ、油断なく病人に宮づかわるること、ひとえにやつこのごとくなるを、人みな見て奇異の思いをなせり)

右の文の二か所の「ひにん」に当たる語は、スペイン語の原典では「貧しい人々」である(二五二〇、二二三三、三一五の「ひにん」についても同様。なお「ロドリゲス日本大文典」に引例中の「ひにん」も同様のようである)。

「日ボ辞書」は本篇に *hina* 補遺に *hinnu* を掲出し、前者には「マドシイヒト」、後者には「すなわちヒニン」と記してそれぞれ語訳する(コリヤードの「羅西日辞典」は大塚氏の索引によれば「ひにん」の方だけである)。前者に対しての「邦訳日ボ」の注は、「ヒニン」に宛てる漢字が「非人」でなく「貧人」であることの理由をも示している。そこに引かれているように「ぎやどべかどる字集」(高羽氏翻刻本。四七頁)には「貧人」とある(「ひにん」も「非人」もない。「落葉集」には「易林本節用集」と同様に「非人」「貧人」がある)。一方、姉崎博士は前掲の文中での「ひにん」に対して「非人」を宛てられた。博士がこの語をどのような意味に解しておられたかについては「捨世録」の中で「非人と貧人と通用」(前掲書一二二頁)等のように脚注しておられることによって察することができ、*「日本国語大辞典」*は「非人」の条を五分類し、四番目に「非常に貧しい人」の用例として「愚迷発心集」などから引く。国内文献では次掲の「庭訓往来」等の「非人施行」などの場合をも含めて、「ひにん」は「貧人」でなく「非人」と書かれている。

接待千僧供養、非人施行等也(寛永八年版「庭訓抄」下37オ。ただし古典資料12としての複製本による。抄文に「非人ニ施行スト云ハ、毎月アラザル者ノ門乞ヲソラサズ、物ヲ引、是也」とある)

結局「ヒイデスの導師」における「ひにん」は「貧人」の意味に解すべきであると思われるが、翻字に際して「非人」とするか「貧人」とするかは、国内の用字例に従えば前者となり、キリシタン資料の国字本によれば後者でもよいことになる。しかし後者の例(「貧人」が孤例のようなので「ぎやどべかどる」における何らかの誤り(たとえばもと漢字を「非人」とすべきであった、あるいはルビを「ひにん」とするはずであったというようなこと。ただしかりに誤りであったとしても、この語の次が「貧賤」であることや「日ボ辞書」の「ひにん」などから考えて、その由って来たる所は単純ではない)を想定する余地が生じるように思われ、「非人」とする方が穏当かと考える。「ヒイデスの導師」には「ひにん」の用例も四六三九、五〇八七二にある。なお「コンテムツス・ムンチ」の前掲のローマ字本と国字本との間に「ひにん」「ひんにん」および逆の「ひんにん」「ひにん」という動揺例が見られ、意味が等しく発音上も小異しか無かった二語の同時存在のもたらした現象と解される)。ついでに、これと関連して「かびやう」の場合を考えてみると、「か

んびやう」(*cabio* 看病)と同じ意味で、

*Bōnin ni cabio* *uo naxi* (二〇五九。病人にかびやうをなし)  
のように用いられているが「かびやう」は右のはか一七八、四六五九にあり、「かんびやう」は四六六三にあって、*n* の入った方が後に出現することは、「ひにん」から「ひんにん」への場合と等しい、この「かびやう」に漢字を宛てるとすると、「加病」であろうか、「看病」であろうか。「ぎやどべかどる字集」にはどちらもなく、「落葉集」には両方共ある。「日ボ辞書」には *cabio* と *Caboe* との双方を見出しに立て、後者には「または *caboe*」とし、前者の説明において「本来の正しい語は *cabio* であるけれども、話し言葉では *caboe* という形もまた通用している」と述べる。この考えに従えば「かびやう」は「看病」と書くことになるが、「落葉集」に従えば「加病」で(も)よいことになる。国内文献における「加病」の用例は「東寺百合文書」にあるが(年不詳。「日本国語大辞典」による。「大漢和辞典」にはこの語は掲出されず、「加病」という用字は「かんびやう」(看病)の語が発音の上で「かびやう」を派生して以後に、宛てられたか

と考える。したがって「加病」は「貧人」と同様に、一時期に一部に行われた用字に過ぎないのではないかと思われ、「かびやう」に対しては「看病」を宛てるのがよいと考える。

〔3〕「みやづかわるる」の「るる」について。前引の文中に、  
手水を捧げ、油断なく病人にみやづかわるること、ひとえに奴のごとくなるを

とある「るる」は尊敬か受身か。つまり意味上は「大人が病人に奉仕なさること」か、それとも「大人が病人から使役されること」かという問題である。原スペイン語では「手洗水をかれらに与え、随分気をはって病人たちに仕え……」という意味であって、受身表現ではない。この文よりも前に、先引のように「下女のごとく使われ」という受身の用法があるけれども、他面、「宮づかう」という四段動詞の使い方を見ると、自動詞の「奉仕する」(身のまわりの世話をかがいしくする)意で「病人に宮づかい給う」とあるので、この「病人に宮づかわるる」も他動詞の「召し使う」の受身とは取らずに、尊敬と見る方がよいかと思われる。他動詞の用例は『日本国語大辞典』では『古今著聞集』等から挙げているので、当時存在していたことは否定できないが、『日ポ辞書』の *Miazucan, Miyazucan* はどちらも自動詞としての説明なので、この点からも尊敬説が支えられるであらう。

一五九二年天草版「ヒイデスの導師」に関して考究すべき問題は以上に尽きるわけではない。特にその用語についての国語史的考察は説き残したところが多いが、それらについては筆硯を新たにしたいと思う。終わりにライデン大学、上智大学、天理大学、近松洋男教授、榎田喜三氏、そのほか御厚情、学恩を賜わった多くの機関、方々に深甚なる謝意を表する。(1980年9月30日)